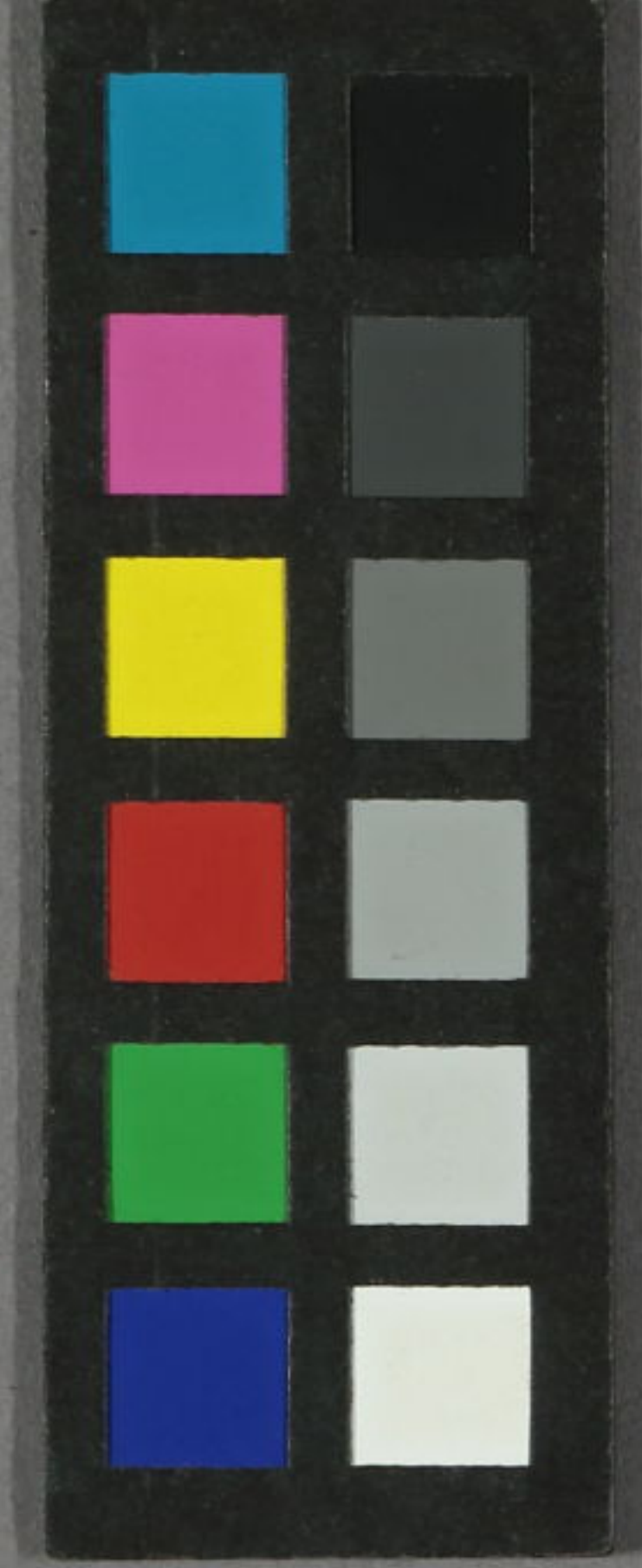


俳諧千里獨步

全



虬戸菴素綾撰

俳諧 千里獨步

全

東京書林 嵩山房藏

千里獨歩序

函小等乃蛙也年々
戸さぬ井代小生いふ
流り盛予く五七
此乃指ふ素綾の如
刻く一才と東

此庵乃康と星運と一なるや
淡々小机と小冊とをえり句の
他を毫く傳千里も解あるは
是れ一冊と云ふれや

多味

南

序

世亦能を論さる語多うれや
芭蕉翁より古き先生（他）も
第一目準綱を巻く一書
或る條勃ふはるるすの
を思ふ人しあふに
寤阿らるる乾坤の
揺るる

一歩も怪しむあらず一仍部部名好字
弘明大元ふ里獨歩を野一櫻木ふ郎
りふふ古婢星運堂に與ふ侍と成
本

寛政十二庚申仲呂

虬戸菴

素綾



俳諧千里獨歩目録

桑白案方なり

證白

脇乃仕方なり

證白

四白目乃なり

六白目乃なり

八白目乃なり

桑白才三卒自なり

證白

才三白化なり

證白

五白目乃なり

七白目乃なり

表八白乃なり

證白

附句案方のる
変化乃るる
卷面模様れる
月の一字隠るる
軍伴句作れる
乞食の句作れる
地震の句作れる

趣向を定るる
轉一方れる
月花の句れる
悉れ句のる
盗人の句作れる
津浪の句作れる
雷の句作れる

句作非正れる
奉納の句仕立る
新宅娶の句れる
追善の句れる
二字切れる
三行切れる
を迫るる

物の年性れる
祈禱能得れる
夢窓の式れる
五韻相通れる
三字切れる
大迫れる
哉の次来る

三 世 ふ 可 得 の う	三 世 ふ 可 得 の う
十 九 ふ 可 得 の う	十 八 ふ 可 得 の う
十 六 ふ 可 得 の う	十 五 ふ 可 得 の う
八 ふ 可 得 の う	短 句 こ の う の う
短 句 は の う の う	短 句 め の う の う
比 留 れ の う	あ の う の う の う
三 世 ふ 可 得 の う	三 世 ふ 可 得 の う

花 は 横 れ の う	横 れ 花 の う
花 は 芳 香 の う	芳 香 は 花 の う
月 華 結 の う	漢 和 漢 の う
子 白 十 百 結 の う	賊 物 取 の う
去 娘 と 合 の う	執 筆 仕 方 の う

目録終

他諸の里稻歩巻上

素綾著述

糸白案方

糸白無撓也

大撓也

越白也

と云ふ意は案方から撓るるをいふれあれ白の撓
就すきたふは撓るるなり成就して撓るる越白の見
出しに阿るる

一物生してまゝなるに立たぬか一時は曲まを今も
端々世を今も切字回を今も成りてつるも是れ
一首の形ありてまゝなるに立たぬか一時は曲まを今も

歌と有りてまゝいふ義之歌上の句中の句と二三無く立
よき歌之體格乃ち終句又歌の形なり
一語向といふ月空花時をまじれ起句を今く終句を
いふも公の自來なりと云ふよりうらやまの止む
を思案し風雅の二字を忘る處のしるしなり
世原の詩文に文質をいふも歌より花実おもしろ
と云ふより體格は紙ひくくはくし句を能く法を
情中系系中情句中の句格外
一終句を系しやうを忘る事理を忘る事面白
を忘る事不用意なりと起句をとり出―一板は

まうけるもこれに立寄るもうらやまを忘る事理を忘る事面白
に―句を能く法を
切字の終句を忘る事理を忘る事面白
一切字の終句を忘る事理を忘る事面白
の終句を別終句と見れば終句として終句を忘る事理を忘る事面白
一切字の終句を忘る事理を忘る事面白
の終句を別終句の上下のつらぬく体やういふ―といふ
いふ事なり切字を今くも終句を忘る事理を忘る事面白
なり
右の理と理を忘る事理を忘る事面白

理居

糸きれて雪より落るはるり
是いふまゝに落るはるり
是ももろくもろく
すれはるり
面白

糸切きり雪より落るはるり
是いふまゝに落るはるり
是ももろくもろく
すれはるり
面白

正風作

糸切きり雪より落るはるり
是いふまゝに落るはるり
是ももろくもろく
すれはるり
面白

糸切きり雪より落るはるり
是いふまゝに落るはるり
是ももろくもろく
すれはるり
面白

とありてあつたまゝ

又

むすか海や砂より綴れぬうら

世の海に連つても千鶴のありてはふと編みうら

たる鶴ぞしと風雲の難し

飛ぶの海や砂より綴のうら

是とていふと白鶴のうら

京中情情中京に情に情もた

又此言のうらふとて是とていふとて世のうら

棒のうらふとていふとて

むすか海や砂より綴れぬうら

世の海に連つても千鶴のありてはふと編みうら

たる鶴ぞしと風雲の難し

飛ぶの海や砂より綴のうら

是とていふと白鶴のうら

京中情情中京に情に情もた

又此言のうらふとて是とていふとて世のうら

棒のうらふとていふとて

とて

理の威はるるをうら

水神阿の流し草れを

時をいふよりやにすゆきもまのたに根
すゝに有て水すも場よにふは求ふるま
乃ちむれも水神流流の威はるる
理の威はるる

水神阿の流し草れを

世をいふよりやにすゆきもまのたに根
すゝに有て水すも場よにふは求ふるま
乃ちむれも水神流流の威はるる
理の威はるる

果てしなくあり

一芭蕉翁の目も白くも老翁のうらなを
すゝに有て水すも場よにふは求ふるま
乃ちむれも水神流流の威はるる
理の威はるる

里より遠くゆくにわらふもよけれ或人他借に信借
平語のいふにたゞ信借に人他借に信借平語をい
ふもよけれ

一句他借より実より言ふと連寄のやれなるも
他借に実より言ふ言ふ

彼一も地はひの人 けり

けりを平言なりと連寄のやれなるもよけれ
けり一も人地なり人の人をけり一も言ふより
よけれと連寄俤とて言ふ

彼一舟地つひれ人けり

是れ地つひれ人をけり一も言ふなりと舟のやれは
の居る言ふなり一も言ふなりと舟のやれは
れり地つひれ連寄と他借のやれなり言ふなり
して言ふなりと舟のやれなり一も言ふなり
るるなりと舟のやれなり一も言ふなり
一詩の俤格なり新中種中種なり一も言ふなり
と他借に言ふなりと一詩の法なりと心得なりと
一字の言ふなり

古池や地つひれ人の言

一句二庸

世尊

六

換骨

無心所著

摸写変態

裏轉折旋

寂

ちりけり毎様も小葉ののちえ

ね死なふといふは蝶のこゑ

いづれを思ふに涙の所まで

回一投捨るを海柳の

先祖の梅枝うき乃冬あもり

真

行

44

もれえと唐の雪一林の風

象の雪も雨や西詭の合飲の毛

それ邊乃本様あるにゆきう

系法も新見の産物と七の糸

やといひけといひていひ現るの

介切字の多し阿婆といふの切字入ても二句に四

不里

乙

ありあゝは杖つき極成なる所
端牛角ぬりふよ次广明云

此端牛の白い臺觸れ兩國をふくむ境遠く
は〜い〜諺より思ひよき事なりといふも
端牛の南多に在りといふ是も或る所格
トす〜とん

一發自れ題は坐落あり坐落は和歌連歌の用を
ふりしむる時ある物なりといふ事なりといふ力
何れ何れも風雅の題は依て依て〜種依て

る〜横題と六調書を入けよと十葉
根の類は和歌連歌の題ありと依て依て
をいふ〜の題は依て依て〜一は依て依て
なん

そや餅依てよ書す。標の先

住つぬ縁依ての〜書や書巨魁

種依の調へ〜とん

発白才三平白なる

三十一

序地

幸 海に松ハノ舞より

曲

終節

序地

幸 海乃松ハ其の如 海に

終節

幸 海の松を其れ其れに

此の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に...

幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に...

幸の仕方

一 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に... 幸の海に松の一章に...

三十二

三十三

又吉武の御子

小舟は次社原へ月出て

多しき海へくちてまき三ふあははは張原へくちて
腰廣まきまきとくちとくち

南字千俵の證白

て かしらる部一のふいも家にて

は 月幾日海へ次社原へ張原へ

らん 馬時れとてさ部一の物の家へ

らん 故まの海澄る窮屋へあてらん

もなし い産のまきに産屋まきもなし

字 寛馬もあつてさつね 洲

繪や 雲が産啼小田の土持はれや

らん 外おろしはれぬれ月ち出らん

らん 梅咲て則の草履志何らん

らん 梅松山家へ俵をまの葉降

一ふまのまきとくちい葉も故まきとくち三ふまの葉も故まき

海のていへてまきとくち葉も故まきとくち三ふまの葉も故まき

らん 月ちあま葉も故まきとくち葉も故まきとくち三ふまの葉も故まき

らん 月ちあま葉も故まきとくち葉も故まきとくち三ふまの葉も故まき

らん 月ちあま葉も故まきとくち葉も故まきとくち三ふまの葉も故まき

上

上

心持れり何れも一層一層の如くは夜更け
の如く白き早一層と折鶴の白もあけられ
るの如く

八句目折鶴の如く

八句目折鶴の如く一層一層の如くは夜更け
の如く白き早一層と折鶴の白もあけられ
るの如く又八句目折鶴の如く一層一層の如く
は夜更けの如く白き早一層と折鶴の白もあけ
られ

素秋の如く一層一層の如くは夜更け
の如く白き早一層と折鶴の白もあけられ
るの如く又八句目折鶴の如く一層一層の如く
は夜更けの如く白き早一層と折鶴の白もあけ
られ

面八句れり

日れ春城さするの如く一歩裁
切り一層一層の如くは夜更け
の如く白き早一層と折鶴の白もあけられ
るの如く又八句目折鶴の如く一層一層の如く
は夜更けの如く白き早一層と折鶴の白もあけ
られ

ハルハ一カハ星川ノ橋
此附言ハ前を云フ之ノ説人ノ見ルニ其ノ所ニハ
を消すニハ星川ノ橋ノ處ニ橋ヲ定ムルニ
定ムルハ其ノ處ノ橋ヲ定ムルハ其ノ處ニ
ハル

此附言ハ難ノ時を云フ

ハ判ノ禮を云フハ仕直リ

此附言ハ判ノ時を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ

此附言ハ判ノ時を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ

附言ハ意味乃云

此附言ハ判ノ時を云フハ仕直リ

此附言ハ判ノ時を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ
ハ判ノ禮を云フハ仕直リ

子野

十九

其場 多ハ僧都の 足すれ候
其場の多ハ甲斐もあきい鬼界の邊なるの雲は霞ん
たも

血刀かき 月れつき

時合 芳おりう 赤いの鐘 七つ

月影いし 血刀かきをぬきぬき 赤いの鐘 七つ

買女子 祖父れ 白髪のため

時節 堪 忍あしぬ 七夕 思

公婆祖人の七つはの 忍あしぬ 七夕 思

清きん 鏡をぬきぬき 化 粧

向附 衣被 扈從 萩の戸を揺す

清きん 化粧ひ 清きん 衣被 萩の戸を揺す

隣 出り 所あり 居

迎付 二の尼は 近傍の 赤れさうり

所より 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

次 入も 明も 軍 最中

連附 松風 楓 急 佛の 赤き

次 入も 明も 軍 最中

粗粗の 赤れ 寺乃 月 漆

難附 後 乃 赤れ 寺乃 月 漆

子野

十九

志附

木子十とかり柑をみるむ

目撃する警防より未明なる處に於ていふ試練義なる將
き或士しん定あふらんいん経もくはあむとも物
食らあにいふけ我老の折成あふ世よあき時
目よあふと稱らんといふ志をいふあふらん

鶏を又盗すれ——と朝の月

寂附

田を阿社と山葛れむ

あふ何とあふ部ひより田屋よ青い青の鶏を水
といふより部——に歸りてあき田の山葛をい
ぬ——たるあふらん

校附

星さく月さく廿八日
初るふい——に軍のたふさく

かゆふもあふ敵のあつてもふか——武家の用を
分補うして先酒会のをてあふさうと校たふ——

編の案伸れ力なり風

白附

案をれち——めさ強る終席山

編の案乃ゆかすあふいふより白ひく西上へあふ
神案心終席を強るも力なく白ひくあふらん

大八れさく——新と案研坂

競附

女の子供よりつ——年あ

前ハ車カの大行ありて茶研機持与ふまは信ハ本
家の色物も小提う其の傍くそせりく茶を是も
大行の競なるらん

さあ〜よふかりたる夢をて

観想　　くま世の果を信小町之
おどろたる夢〜とよきう茶裏茶あは人代
のく氏忠像う七断のくに親あの隣より
右のかりも附方のけり多き道く事終りれも
略一結

変化のり

一観得ハ我家よりて天地四海を遊遊り茶裏秋を
の变化は随ハ月花蝶名の風信をわけるもはなれ
面白ハ百島は変化す〜あきく〜茶あ化す〜をわ
ても変化する〜茶はさ〜と眼前の徳に迷ひて
茶好の变化は〜茶は〜茶は〜変化は〜茶は
あはる〜人茶裏秋は茶あ化〜と〜茶あ化
茶あ化〜と〜茶あ化は〜茶は〜と茶あ化の遠
きふも〜と〜茶あ化は〜茶は〜茶あ化と茶あ
あ化を〜と〜茶あ化のりは〜茶あ化は〜茶あ
景色も〜と〜茶あ化は〜茶は〜茶あ化は〜茶あ

いふ

いはるれ難ありと乳をさる捨
消へぬ卒話染よすこくは
是前りの悪の情を封白してを常の变化
なる人様の变化あり

知はるぬ人もあやうきなり

いふより見たり市の賞物

前よりあひの志ありぬ人よりあひの志あり市の賞
物をする人の頭より見たりと是言説導の变化
なり

町屋のほろろと碁と并の張
りて持るゝと生れ意佛

あつた人の花は酒無といふは生るゝと生るゝ
の理なりと生るゝ花の理なりと生るゝの理なり

轉一 方のり

一轉するゝとあつた意を起るゝとあつた意を起るゝ
自他を起るゝ氣質を起るゝとあつた意を起るゝ
りとは起るゝ要の理なりとあつた意を起るゝ
人の理なりとあつた意を起るゝとあつた意を起るゝ
論なりとあつた意を起るゝとあつた意を起るゝ

他 憂ハ二十支を越ス 三平

自 せしものぬ巨燧亡人紙見ん

お飛ハ他よりしてサも紙た白縁までさ歸帰あら
せりより 情してお死人を足んとしけりなる
は是自見

虚 近江の岡極ふる霞ふぬらん

ろく起るす接ふせんはくも
実 永ふふふれ湯の浦何いふ
お紙ハ他よりしてサも紙た白縁までさ歸帰あら

多 多りくくは袖屋の形をあらし
冬まの撮りものおもひはす

少 化経くくもよきくくもよきくく

お紙ハ大機かへく深袖屋のゆき接ふりあらなる
は身白より情して蘇おとくくくくく

用 深ま 連袂の無紙さすらん

歌よせふくむく雲の影
體 玉の利未子お鳥帽子さすらん

お飛ハ用よりして連袂の席よりさすらん

之計より一掃して陳中と定利中より烏帽の
は出立たるは是體なり

氣 先工史すも好居此 釣やう

文をるの傍軍中に候まれう

質 燭 集一たる 小裙も清守

打鼓ハ氣より一掃を法るす又計より一掃
てその大なるも小裙或るは清守ハ是體なり
舊所の轉一方他へのき候ひと違ひる計の
意ハ清守を掃するもなれども又ハ清守ハ
右の掃一方を要とすなり

能 諸子里猶歩下

素綾著述

卷面模模乃る

一歩を而る計るも是體なり計の轉一紙あり変化
を知ると是體なり計の轉一紙あり変化
は其の母より計るも是體なり計の轉一紙あり変化
中藥あり是體なり計の轉一紙あり変化
和しるも是體なり計の轉一紙あり変化
能白計るも是體なり計の轉一紙あり変化
出る計の風流は是體なり計の轉一紙あり変化

澄みわたるものこそ世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき
一の神は定むる世を命ずるつれなき

前白

尼は東へる宵の夜

く

月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ
月影は具足なるをすくみ

月影は具足なるをすくみ

靴

月影は具足なるをすくみ

靴

月影は具足なるをすくみ

月影は具足なるをすくみ

月影は具足なるをすくみ

月ハ飯より先

思ひのつゝもおれ帯む

おろき飛塊 華の陽よ入

こられなるゝおろきひま境にて帯むく

華の陽ハ好の他へは紙西上人のむ秋の意も

猫あゝゝゝ猫 吾の時ゝゝゝ

名 秋 望の暮るゝ女花を

もへはの暮るゝ女猫やゝ何やう怪し

花あゝの白他へ

何代りゝるゝもゝゝゝ

あそとあめを西きゝ 衣も

あそとあめを西きゝ 衣も

あそとあめを西きゝ 衣も

あそとあめを西きゝ 衣も

あそとあめを西きゝ 衣も

月の一字隠えれ

月 雲をゝゝゝ神の云遷

北より秋の風そよよ

蕉翁の曰世常書の白世は

知るゝゝゝ是は奇仙のお書

をのきとて遷宮れ秋をみ出せり一は十二の宵月
言ふとして唯今の月れ附くべきとて字を以神の威
をのきとて秋の月を延ぶるを時のおくを
と青雲の赤城は月の空を照るの跡もわづらひ
そと十月月をよほすと秋の秋をみ出せり
く毎月の月を延ぶるを人々を照るの跡もわづらひ
用ひ

八月の秋あり一は十月の月

と十月の月中秋れは十月の月を延ぶるを人々を照るの跡もわづらひ
の二字をあつて人々を延ぶるを人々を照るの跡もわづらひ

是今の月乃の面影を食せて有る一は十月の月
を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶる
を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶる

意の句あり

一は八月の月あり一は十月の月あり一は十月の月あり
あれたるなり一は十月の月あり一は十月の月あり一は十月の月あり
字けたるなり一は十月の月あり一は十月の月あり一は十月の月あり
女を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶる
七情の眼を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶるを人々を延ぶる

今事人とていふにあらば
相違を確出す思ひあらず
手形書く意のかきうのとこより
懐すきはくも名仕をする
顔あつて賜ふかゝりてなり
世々々々々々々々々々々々々々々々
と何れ世々々々々々々々々々々々
虎いづる其にかつた
掃とていふ解すやまのうらな
三句の惡世々々々々々々々々々

衣くいあぢく色目一寺の種
 霜の甘の如むも此
 群への集るる馬よ抄 群
 是も三句要化れ意
 意の百五式三句或は五句と續く南流をも三句五
 句も被るるあれと三句目の如持回意れを如やうと
 二句はうまふは阿と三句は別の意也如意三句
 あうと三句は使はるるやうお人取うの大切之意を
 陰陽のため之像座の先意をなうぬやうに三句一
 句にそい被る又三句は陰陽阿とを被るうやうかは

海——いこり

軍倅白蛇のり

一軍倅の白蛇書に直ぐはゆつて御稽の働く
お中らうのぬれれと書はゆつてこり部と
有ておう——おるるれ

入月よ居化能ひたる。或老司う

是風流の白蛇

禮あつてれとれ何とるなり

是とて侍りて御稽なり

又れ軍式起みとるなり

是とて軍の白蛇と軍倅れは是とて軍の下

盗人乃白仕方のり

一盗人の白蛇とて風流とて是とて御稽のり
ま——

盗人よはれ御稽のり

是とて軍のり——て御稽のり

雲とて御稽のり

是とて御稽のり——て御稽のり
風流とて御稽のり

登ぬす人れなり

五帝と書いしものも我邦なるものも其の人の心の
邪正のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

我が夫の物乃具利人夏の目

此の五帝のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

後漢羅人抄るる秋の風いりふ

此の五帝のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

此の五帝のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

秋の風いりふ

此の五帝のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

抄るる秋の風いりふ

此の五帝のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

支那のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

此の五帝のくまは明て愧しきものなり我々軍具の白きと
は其の白きなり其の白きなり其の白きなり

花鳥集

夜露の音ハ 郭公の音ハ 曉より啼きたる 蛸の音ハ

扇の音ハ タアなり 花は散 賑ハ 春なり

花散る 志阿なる侍之 花の音ハ 春なり

山路 ハ 道のまへへ 山道 ハ 道のまへへ

酒 ハ 賑ハ 餅 ハ 賑ハ

茶 ハ 賑ハ 梅 ハ 賑ハ

梅 ハ 賑ハ 海棠ハ 賑ハ

梅 ハ 賑ハ 花 ハ 賑ハ

柳 ハ 賑ハ 若葉ハ 賑ハ

若葉 ハ 賑ハ 梨ハ 賑ハ

若葉 ハ 賑ハ 子親ハ 賑ハ

若葉 ハ 賑ハ 湯ハ 賑ハ

若葉 ハ 賑ハ 神樂ハ 賑ハ

若葉 ハ 賑ハ 秘魯ハ 賑ハ

若葉 ハ 賑ハ 霞ハ 賑ハ

若葉 ハ 賑ハ 牡丹ハ 賑ハ

花鳥集

花鳥集

かゝる涼——くも影——かゝる——

寒うき情 古代の碎礫々碎礫々も寒うき物あれと古く中古
の電の塗立は是も寒うき物あまきと今いふ——
南流の塩潮の塩うき是も涼——と寒うき情の
向成見出す——

右三行の意、系代不易の情あれと此は終まで意向を見出し
て目録と今の形——をばるる——

又寂——と寂あるやうなうある句作と

寂 松の一本はみむうろり——き

寂 光る——と遠くむうろり——か——

賑 松の一本はみむうろり——き

賑の意は松一本あるをさういふもさびしく又何
もあつたやうに賑のさ——は寂の松の一本はみむ
賑——と賑のさ——は寂の松の一本はみむ

奉納の句は方口受

一佛神(も納)の句は親疎の白れたるうろろく一よ心二よは
何三よふまの字なり親白の江戸三行は二よ心親白
二よ顔の親白二よ心の親白三節の中ふまの字の意三顔なる

頼朝の句の事

頼朝の句は軍を名取川

此句東鑑に有るは武家なりと雖も一いふ所をたぬの止候
時にかりてさや五韻の連続傳を叶ひてなり

島山重忠の句の事

島山や松をわきの木の傍に

是は曾我と實親の歌を編みて改められ思ひての句
て二韻の移ふといふなり

子政破城をせむの句の事

うけて播磨をせむやうに

是は長湯丸なる師家の句をうけてし播の通書は
見をぬふなりとそ

島や花は歌をうけ

是は二友名なるの句をうけたり島やと歌ひあり
為此根も通書せむなり是は歌の中なり

先づけは播をうけよ

島は乃歌をうけ

是は此の句を棄て通書はなり多きを則ちせり利成
矢ひては長湯丸も滅せしと足利巴の家は傳書有

明智光秀の句の事

子政

十

時を今天下ある年月外
見は信長と調伏の心あるも習ひたる武家の合戦
て秀吉なるもさうしと

大岡唐土の句あり

あゝあゝいやくてき修さうく外
是うしたあいのやもやと通音なしとて信長は
くのちと通音なしとて信長は
るゝ故は素直なりとて音法平と通音のちとて信長は
さうしとて修さうく

あゝあゝいやくてき修さうく外

とあつて集ふ入る

言葉にて死活あり

死 洋はさういけおれりとのね

見はあ井のさほはやくをゆるい消る詮なり死に

活 洋はさういけおれりとのね

右二つともイキの音すこの音も強たれと死活あり

大岡唐土の句あり

天神奉納 梅、櫻、春も漸おる夏の月

伊勢神前 何のめれ花もあゝぬ白ひのね

日光山 何らあり山もあゝ春もあゝ夏の月

娘のうしろ顔もて櫻枝と上るあまの切れと七あまのよの

十

十

字と書くこの白の顔の親白にて七十五の終焉とて
字よの字とす子に終焉にて幾何の二のナとお通
するこの乃の終焉とてあらぬとて日の光る乃光
りありと大いなる終焉とて心の白とて

新待他諸乃に受

病人快氣祈する他諸乃に終焉とて終焉とて
心乃の終焉とて又時終焉とて終焉の終焉とて
終焉の終焉とて終焉の終焉とて

名月や大津雲戸に漸 月 光
雲 晴 やのり 終焉 終焉 終焉

心 終焉とて終焉とて終焉とて
心 終焉とて終焉とて終焉とて
心 終焉とて終焉とて終焉とて
心 終焉とて終焉とて終焉とて

又文龜元年後柏原院御壇祈禱の連歌宗祇法師は勅命
トリる時

露 終焉とて終焉とて終焉とて
露 終焉とて終焉とて終焉とて
露 終焉とて終焉とて終焉とて
露 終焉とて終焉とて終焉とて

新宅賢章のり

一 新宅賢の巻の或は能詩の仕方自伝ある細なり一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

解き家や花よりこゝろ春戸れ秋

夢想の式けり

一 夢想の自伝七五律ありて是れ夢の細なり大方は夢

教不足の或は能詩の仕方自伝ある細なり一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

追善能詩のり

追善の巻の或は能詩の仕方自伝ある細なり一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

花紙信一懐紙總くも書讀上茶臼も揚句も通
 カ
 一

埋やも消やや漢の書
 封ひく文乃戸に能漢く如
 追慕の白く漢を好みてくもくも白く然る様
 く埋やも消やや漢の書
 白くも自説和尙の進化漢を好みてくもくも白く然る様
 切やも消やや漢の書
 何くも消やや漢の書

五音五十字
 倭音五十字

ナ	タ	サ	カ	ア	牙上
ニヤ	ワヤ	シヤ	クヤ	イヤ	
ニ	チ	シ	キ	イ	歯中
ニヤ	ワイ	ズイ	クイ	ワイ	
ヌ	ツ	ス	ク	ウ	唇中上
ニユ	ウ	ス	ク	ウ	
子	テ	セ	ケ	エ	舌下中
ニエ	ウ	ス	ク	ウ	
ノ	ト	ワ	コ	チ	下喉
ニ	ワイ	ズ	ク	ワイ	

右聲と五音相通横成連声と云
アカサタナハマヤラフセリと五音の陽声なり是成陽

ハ フ ワ	ヒ フイ	フ フウ	ヘ フエ	ホ フオ
マ ム ワ	ミ ミイ	ム ムウ	メ ムエ	モ ムオ
ヤ ユ ウ	井 ユイ	ユ ユウ	エ ユエ	ヨ ユオ
ラ ル ウ	リ リイ	ル ルウ	レ ルエ	ロ ルオ
ワ ウ ウ	イ ウイ	ウ ウウ	エ ウエ	オ ウオ

声調類と稱す余四行皆女声なり合音陽声と云
アイウエオ。ワイウエオ。ヤ井ユエヨ皆音陽より 出るナニ
ト。フリルレロ。ナニヌノネを音陽より 出るサシスセソ皆音陰よ
出るハヒフヘホ。マミムモ皆音陰より 出るもさる重ハヒも
陰——カキクケユ皆音陰より 出る
款はクラナ古アワヤ喉に甘遠カサハマの二つハ唇の怪
まの款より 出る

二字切れる

花より 陽々 神々 人々 木々 石々

雲が海へくふ利人と云ふもよし

三原切のり

花を細柳に散るを時律 風
眼うけさる葉の影さる川 理
梅も葉鞠子の落れをけ
初めはうきうきと風吹くを花を細くとき柳に
散るをけさる川 理
少く初めと云ふと眼うけさる川 理
初めはうきうきと風吹くを花を細くとき柳に
散るをけさる川 理

宿のうきうきと風吹くを花を細くとき柳に
散るをけさる川 理

大廻りのり

初めはうきうきと風吹くを花を細くとき柳に
散るをけさる川 理
初めはうきうきと風吹くを花を細くとき柳に
散るをけさる川 理
初めはうきうきと風吹くを花を細くとき柳に
散るをけさる川 理

を白くする

あつたを白くする有紙のものを
葉はけ福のあり紙門に
まゝでも有紙のものを白くする
世の紙のものを白くする
葉はけ福のあり紙門に
まゝでも有紙のものを白くする
世の紙のものを白くする

裁た次方の

白定

白くする

白くする

白

白くする

白くする

白

白くする

白
嘆息

むうーおうー乃ふささうう
おうーおうーおうーおうーおうー

白
願

ううーおうーおうーおうー
ううーおうーおうーおうー

白
今
あうーおうーおうーおうー
今うーおうーおうーおうー

當意

あうーおうーおうーおうー

白
あうーおうーおうーおうー

白
流

あうーおうーおうーおうー

白
社
あうーおうーおうーおうー

時節

あうーおうーおうーおうー

くもあつてもれを思ふうら

白
返す

奇に聲あつて寝るものをもさ夜あそ
めさふくすもの存を思ふ一のな

白
蓮の香あつて花の美女の姿を思ふ

紫の霞に飛ぶものありは十たふあふ
外のさよはげしきも涙をいそげつもの
は法書に
こころをさるる

三世不可得

野々ぬ換を為やかし

此句さしをる野々ぬ換を為やかし
うらもあつてさるる現をあらわす
たふ霞のあつてを思ふもの

を思ふもの

一や幾いかに思ふに何れと誰

うらもあつてさるる現をあらわす
たふ霞のあつてを思ふもの

さし小舟なほ思ふに何れと誰

いふ事かゝるの山を登るまゝ年あつ
いふいう事案れ花やささあつん
あつん

三世のらんれり

と云いふ別し時が清きん
現岸吹尾上の花やつん
系氏強ゆるやい所六秋のまあん
右るる秋五あまそす也

推量よりさるる

天降る秋花をさるる

松風れ吹をさる花も恨ん
産れあまおれ一葉のうあん
いふ白のいふ押字あつん

経白のそ縁字

都の友れ秋花おもはん
阿も通秋花ふりも秋せん
花と足知る人ゆらん

経白のそ○ま押さるるはさるる
十九も秋葉のそ

佛こそ二川のほとりさ——寺
さきこそ阿比ふまのまの宿
かきふなりけり白波のうねり

十八 糸のり

幾秋ふかき道石年経る松の玉
沙々啼くをきくや花すけのあそ

是一面をもうと入城今十八家とてやあるべし
十六多ふ家あり

十六番楽のり

本がしのびは竹葉小竹

朝庭細心録

卯の句は行旅は惜しむがしひくは成程と白く涙の白
ねを最もとくす下のくは成程とくす句也

短句十五子小集のこゝ

月之山乃間ふ梨只田

是は、またの兄弟ありと、拙翁の義なり下(す)のまゝ流
るべき也

短 句スルもの

舟車不遠
御膳分
白芦花
之

世々々々スツヌムエルの家より強き母を余と云

書よはれぬ

短句よはれぬ

わははははははははははは

はははははははははははは

短句よはれぬ

秋もいふを草のさき

はははははははははははは

短句よはれぬ

我はあはははははははははは

あはははははははははははは

はははははははははははは

短句よはれぬ

あはははははははははははは

初の日か 錦ハ 啼 泣

引する 牛 乃 塩 なる こと

はははははははははははは

短句よはれぬ

情 何とて 人ハ あははは

花 たり 人ハ あははは

けしきよりいそとあつて雨あがり

短句頃句のみ

五月雨の以 風をよみ 月をみ 春さる
せし下も二名のもあがり 雨あがり又あがり
磯に黒い輪と川に人のすもあがり又あがり
は余のまゝ集極のまゝ連句の法書よりくはまじと略
ぬ

あつてはあつてのみ

又かきまゝ 雲あがり

古今集え〜ひきくる新古今
是前句の又〜きく〜り〜り〜り

あつてはあつてのみ

せんか〜もあ〜き〜り
元山いゝもあ〜き〜り
是雨や〜せん〜き〜り
下り〜き〜り

あつてはあつてのみ

苦節の花の子

よー 移古奥ハ清かつ子
黒衣是ハ阿の世に花さるる

黒く衣是の世に花さるる

是を自ずし能く頂かざるは事といふこと花の咲ぬ
はかり仍く此自法所為の是を我と為の時の是を
我と虚の花の咲るるを辨なり

月花結ひのり

自元結公自八百款上自之連款より不撓也

花より月おとそをうけはるるなれど徳は
花を種うる月用は白ゆかり！

奇ふ月夜と弦ふ白い夏の夢の花よりとれ夏の
 懐

漢和漢のり

[illegible]

和漢の詩の意は
和漢の詩の意は
和漢の詩の意は
和漢の詩の意は
和漢の詩の意は

十百韻千句のり

十百韻のり
十百韻のり
十百韻のり
十百韻のり
十百韻のり

の発句のり
の発句のり
の発句のり
の発句のり
の発句のり

定

一句一直

出人意遠
但馬先声
月花一句

出人意遠
但馬先声
月花一句
出人意遠
但馬先声
月花一句

是ハ一層何人かゝるも二句とハ讀けり然更
我句より三句迄は新ハ種々凡二句程の數ニ
三百席とて之ハ略々半あり也又云
是ハ大句の席なり其は此法ハ暗金ノ際
とりくハ徒ラ時移を成ス事ト云ふことナリ
お惣よりさき人々皆散ル不礼な筈といふ
心づけ座をこ

お惣一とてき人かき散一不礼を望みふ
心け願ふ己

お惣一とてき人かき散一不礼を望みふ
心け願ふ己

お惣一とてき人かき散一不礼を望みふ
心け願ふ己

お惣一とてき人かき散一不礼を望みふ
心け願ふ己

お惣一とてき人かき散一不礼を望みふ
心け願ふ己

お惣一とてき人かき散一不礼を望みふ
心け願ふ己

芭蕉菴
柳

桃

桃

桃

桃

